死神サークルII

正義への復讐

春日信彦

目次

1

情報収集

三大成人病と言われるガン、脳卒中、心筋梗塞、の罹患者増加に伴って、そのことへの危機感からか、医療保険の自主的加入申込みも年々増加している。医療保険では、入院費の補填やがん治療が目的だから、得をするのは被保険者となる。だから、自主的申し込みの増加に納得がいく。一方、自主的に死亡保険の加入申し込みをする人たちもいるが、彼らはどんな思いでいるのだろうか?死亡保険の場合は、被保険者が死亡した場合に、受取人に保険金が支払われるので、得をするのは受取人ということになる。一般的には、大黒柱であるご主人が、死亡後の家族の生活費のことを案じて、配偶者もしくは子供を受取人にして死亡保険に加入する。これは、ご主人の家族への愛の証だ。ところが、死亡保険加入を拒否するご主人もいる。

11 月 2 日（月）横浜支社に保険の話を聞きたいとの電話があり、伊藤所長は新人の羽多に担当させた。翌日の文化の日に、羽多は、東急東横線を利用して、横浜駅から大倉山駅に向かった。大倉山駅で下車すると駅近くのスタバに向かった。約束時刻は午後 3 時だったが、20 分前にテーブルに着くと、医療保険の説明資料をめくりながら、頭の中でロールプレイングを行った。モカコーヒーを飲み終えた羽多は、ショートヘアのジーンズ女性を待った。ちょうど 3 時、ジーンズの茶髪女性がドアを開いた。依頼者に違いないと直感した羽多は、立ち上がると彼女に笑顔を向けた。彼女は、軽く会釈をすると羽多のテーブルにかけて行った。「コスモ生命の方でいらっしゃいますか?」羽多は、即座に返事した。「はい。鈴木真樹様でいらっはいますね」真樹は、うなずいた。「ちょっと、待っていただけますか?」真樹は、コーヒーを片手に戻ってくると笑顔で席についた。

せっかちな羽多は、彼女が席につくと即座に話を切り出した。「保険について、お聞きになりたいということですが、医療保険についてでしょうか?」真樹は、一瞬、困惑したような表情を見せ、返事した。「いいえ、加入したいのは、私ではなくて、何といえばいいか、父に、加入してもらいたいのです。でも、加入したがらないのです。どうすればいいか、と思って」全く予想外の相談に、即座に返事ができなかった。とりあえず、事情を聴いてみることにした。「保険の加入には、ご本人の告知が不可欠です。お父様が、加入なされない理由は、どういうことなのでしょうか？」小さなため息をついた真樹は、けだるそうな口調で話し始めた。「どういうこと、って言われても、保険には、入らない、の一点張りなんです。私たちのことが、かわいくない、ってことなんじゃないですか？」

2

加入意思のない人を説得するのが、生保レディの仕事であることは、重々承知している。でも、子供が説得しても拒否する父親を第三者の生保レディが説得できるのか？ 不安ではあったが、まずは、行動を起こすことにした。「それじゃ、お父様に、保険の必要性をお話します。どこまで、やれるかわかりませんが」うつむいていた真樹は、顔を振った。「それが、話を聞こうとしません。何度か、話だけでも聞いてよ、って言ったのですが、聞く耳を持ちません。あ～～、どうすれば、いいのでしょう」話を聞こうとしなければ、生保レディもお手上げ。面談できなければ、前に進まない。「そうなのですか?面談できなければ、勧誘ができません。何か、保険会社に恨みでも?」

真樹は、しばらく黙っていたが、顔を持ち上げ返事した。「わかりません。父とは、5年前から、別居しています。家族が嫌いなんだと思います。離婚するつもりかもしれません」保険の相談というより、身の上相談のように思えてきた。この際、樋口先輩にバトンタッチしようと思ったが、面談できないんじゃ、樋口先輩もお手上げのように思えた。「保険は、家族への愛の証だと思います。お父様のお気持ちが変わるのを待ってみては、いかがですか？」肩を落とし、がっかりした表情で返事した。「気持ちが変わるでしょうか?変わらなかったら？」これ以上、何と言っていいかわからなくなった。「保険を無理に加入させることはできません。待つ以外、ないと思います」顔を突き出した真樹は尋ねた。「父に黙って、加入させることは、できませんか?掛け金は、ちゃんと払いますので」

羽多は、とっさに身を引いた。あきれ返った羽多は、即座に返事した。「それは、絶対できません。保険加入には、ご本人の告知が不可欠です」真樹は、ハ～～と大きなため息をついた。羽多は、これ以上話をしても、らちが明かないと判断した。「それでは、お父様のお気持ちが変わられましたら、お電話ください」真樹は、悲壮な顔で訴えた。「え、気持ちが変わったら？ 父の気持ちは、変わりません。だから、お電話したのです。とにかく、加入させたいのです。父に、万が一のことがあたら、家族は、路頭に迷います。私は、まだ、学生だし。お願いです、父に保険をかけさせてください。お願いします」なんだか、雲行きがおかしくなってきた。犯罪のにおいが漂ってきた。「お気持ちはわかりますが、ご本人の告知がなければ、加入はムリです。諦めてください」

3

真剣なまなざしの真樹は、質問した。「本人に黙って加入した場合、保険金は支払われないんですか?」もはや、犯罪行為。即座に、返事した。「当然です。告知義務違反ということになり、発覚すれば、保険金は支払われません」一度うなずいた真樹は、尋ねた。「発覚しなければ、支払われるのですね。突然、新型コロナで亡くなれば、発覚しないと思うんですが」親を殺したいのだろうか、と一瞬、疑った。「発覚しない場合もあるかとは思いますが、これは、犯罪です。決して、やってはいけません」真樹は、小さくうなずいた。「そうですよね、犯罪ですよね。でも、新型コロナ感染者が急増してますよね。本当に、新型コロナで死亡したら、どうしよう」

そこまで心配してたら、きりがない。誰だって、一生に、一度や二度、危険な目にあう。心配性にもほどがある。さっさと話を切り上げることにした。「心配いりませんよ。お父様の気持ちも変わりますよ。この辺で」羽多が腰を上げようとした時、悲壮な声で訴えられた。「待ってください。見捨てないでください。家族にとっては、生きるか死ぬかの問題なんです。父は、借金してるみたいなんです。お願いです。どうにかしてください」恰も、死亡保険金で借金を返済したいと言っているようなもの。たとえ、保険に加入したからと言って、即座に、家族が得をすることはない。逆に、掛け金を負担することになる。「今も言いましたように、本人の告知なくしては、保険の加入はムリです。もう一度、お父様を説得してみてください。私には、これ以上のことは、言えません」

真樹は、手を合わせて懇願した。「お願いです。保険に加入させてください。私が、こっそり、申し込みします。発覚しなければいいんでしょ。黙っていれば、わからないはずです。お願いです」もはや、正気ではない。きっぱり言うことにした。「仮に、お父様に無断で加入されたとして、お父様が亡くならなければ、保険金は支払われません。100 歳まで、長生きされるかもしれませんよ。借金のことでお悩みのことは、分かりますが、私には、どうすることもできません。お気の毒ですが」真樹は、つぶやいた。「いいえ、長生きなどしません。きっと、近々、新型コロナで死亡します。私の予感は、当たるんです」羽多は、眉間にしわを寄せた。先月は、自殺願望の学生。今月は、借金返済のために父親に保険をかけたいと訴える学生。全く、疫病神に取りつかれている。

4

身の上相談となれば、人生経験の多い樋口先輩に任せる以外ない。でも、ここまで話を聞いてしまえば、後には引けない。とにかく、知恵を絞ることにした。「事情は分かりました。とにかく面談しなければ、前に進みません。お父様に会いたいのですが、どちらにお勤めですか?」真樹は、目を輝かせた。「そうですよね。とにかく会って説得してください。父は、横須賀街道沿いの三ツ星運輸本社に努めています。総務課長です。でも、生保セールスと言えば、面会しないと思います」羽多は、気にかかることを質問した。「ところで、お父様は、ご健康ですか?何か、持病があるとか?」真樹は、首をかしげて返事した。「健康だと思いますが。でも、5 年も別居だし。今は、よくわかりません」

羽多は、保険加入拒絶の原因は持病にあるのではないかと察した。「会社では、年一回健康診断をやります。だから、健康状態を知ることはできます。そうなのですが、面会できなければ、そのことを知ることもできません。どうすれば・・」真樹が、苦虫をつぶしたような表情で返事した。「まったく、バカおやじ。保険と言っただけで、夜叉の形相で怒鳴るんです。” 会社のグループ保険には入っとる。これで十分だ。” だから聞いたんです。グループ保険で、いくらもらえるか。そしたら、たったの、300 万。これぽっちじゃ、葬式代じゃないですか。言ってやったんです。お父さんが死んだら、250 万の学費、だれが払ってくれるのよ。そう言ったら、” 俺を殺す気か！” だって。どうしよもない、バカなんです」

よくよく聞いていると不安に思っていることは、学費のようだった。「困りましたね。何かいい方法があればいいのですが・・かなり、頑固なお父様のようですね。できれば、もう一度、ご家族で話し合われては、いかがでしょうか?」真樹の顔色が青白くなった。「絶望的ですね。もう、いっか。諦めます」羽多は、力になれなかったことをお詫びすることにした。「お力になれなくて、申し訳ありません。お元気そうなお父様じゃないですか。きっと、長生きされますよ。それでは」羽多が腰を上げた瞬間、またもや、呼び止められた。「お急ぎですか?ケーキでもどうですか?話を聞いてくださったお礼に、おごります」ケーキと言う言葉が、頭をしびれさせた。「あ、まあ、そう急ぐこともないんですが」羽多は、腰を下ろしていた。真樹は、笑顔で勧めた。「モカケーキ、どうです?」羽多は、笑顔でうなずいた。

5

一口食べ終え、気持ちが落ち着いた真樹は、小さな声で話し始めた。「父のことなんですが、別居中じゃないですか～、なぜだと思います?」突然の質問に返事ができなかった。羽多の両親は、仲が良く、夫婦喧嘩をしているところを見たことがなかった。「え、わかりません」真樹は、話を続けた。「大きな声では言えないんですが、別居するってことは、女ができた、って思いませんか?それで、一度、おやじのマンションに遊びに行ったんです。犬のように、クンクン、部屋中のにおいをかいで確認したんですが、全く女のにおいがしなかったんです。まあ、おやじは、女にもてるほどイケメンではないので、納得したんですけど。女ではないと確信して帰るとき、ちょうど、お客がやってきたんです。そのお客というのが、とても人相が悪くて、ヤクザみたいな感じだったんです」

真樹は、一呼吸して、話を続けた。「それで、家に帰って、電話で、聞いてみたんです。人相の悪いお客は、ヤクザじゃないの、って。そしたら、トラックの運転手には、人相の悪いのが多いのさ、って言ったんです。でも、その時から、悪い予感がするんです。ヤクザとつながりができたから、別居したんじゃないかって。羽多さん、どう思われます?」やはり疫病神に取りつかれてしまった。今すぐにでも、おみくじで大吉が出た相州春日神社に行って、お祓いをしてもらいたい。でも、相談を受けた限り、逃げ出すわけにはいかない。自分なりの意見を述べることにした。「人相の悪い人っていますよ。悪役の俳優がいるじゃないですか。気にしなくて、いいと思ますが」

真樹は、首を傾げて、神妙な顔つきで話し始めた。「でも、別居の理由が思い当たらないんです。夫婦仲が、険悪ってわけでもないのに、別居でしょ。別居するからには、何か、訳があるはずなんです。あくまでも、私の想像ですが、あの時のお客は、マジ、ヤクザだったんじゃないかと。それしか、別居の理由が思い当たらないんです。もし、そうだったら、ヤクザとつるんで、悪事を働いてるってことですよね。そうでなければいいんですが、いやな予感がするんです。最近、おやじの顔も、人相が悪くなってるような気がするし。心配なんです」込み入った話になってしまった。ヤクザの話をされても、何と言って答えればいいのか、全く分からなかった。

6

ヤクザのことは、よくわからなかったが、保険とのかかわりで考えてみることにした。ヤクザに利用されているのであれば、いずれは用済みになる。そして、口封じのために殺されるかもしれない。そう考えれば、保険に入っていた方が得策ではないか。でも、お父様は、保険を拒絶している。ということは、ヤクザとはかかわっていないということではないか。いや、逆に、多額の保険に加入すれば、保険金目当てに殺されて、さらに、保険金受取人は恫喝され、保険金が奪われるとも考えられる。一瞬、大凶の落とし穴に落ちてしまった。気持ちを切り替えて返事した。「あまり悪い方向に考えられないほうがいいんじゃないでしょうか。三ツ星運輸と言えば、一流企業じゃないですか。しかも、本社の総務課長をなされてるんです。立派なお父様じゃないですか。信じてあげましょうよ」

真樹は、静かにうなずいた。「悪い予感が外れていればいいんですが。最近の父には、明るさがないんです。かつては、冗談も言ってたし、明るかったんですけど。何か、隠し事があるような、後ろめたさがあるような、どこか、変なんです。私たちから、どんどん、離れていくようで、怖いんです。単なる思い過ごしだったら、いいんですが」真樹の不安が、じわじわと羽多の心に伝わってきた。もし、本当にヤクザとつるんでいたとしても、生保レディには、何もしてあげれない。面談して、ヤクザの話を持ち出したら、危害を加えられるかもしれない。君子危うきに近寄らず、と言うではないか。でも、一度どのような方なのか見てみたい気もした。心が澄んでいれば、風貌に現れる。「真樹さん、お父様を信じましょう。それでは、一度、三ツ星運輸に行ってみます。お父様に会えるかどうか、わかりませんが」

真樹は、目を輝かせた。「そうですか。そうだ、父へのセールスということでなく、社員さんたちへの勧誘ということで父と面談されてはいかがですか?外部の方は、必ず、総務課長を通すことになっているそうです。必ず、父と面談できるということです。ぜひ、アタックしてみてください」羽多は、企業開拓はやったことがなかったが、この機会に企業開拓にチャレンジすることにした。すでに、わが社がグループ保険契約を結んでい

るとも考えられる。まずは、支社で確認することにした。「真樹さん、とにかく三ツ星運輸にアタックしてみます。お父様に面談できて、私が気に入られたら、加入してくださるかもしれません。頑張ってみます」

7

羽多は、次第に真樹に親しみを感じ始めた。保険のお客様というより友達のように思えてきた。家族について聞いてみることにした。「真樹さんのお母さんは、お仕事なされてるんですか?」真樹は、笑顔で返事した。「母は、看護師なんです。O 記念病院に勤めています。母は、鉄人です。私には、到底、真似はできません。母のように気丈じゃないし、あんな過酷な仕事、私には無理です。それで、母の勧めで、薬剤師を目指したんです」

真樹も羽多について知りたくなった。「羽多さんは、お若いじゃないですか、どうして、生保レディになられたんですか?」羽多は、隠すこともないと思い事情を打ち明けた。「よく、言われるんです。はっきりえば、リストラです。J 旅行会社の本社で事務をやっていたんですが、突然、北海道支店の営業に回されたんです。ムカついて、辞表を出したんです。退職後、いくつか、事務職を探したんですが、時期が悪かったのか、どこもダメでした。コスモ生命横浜支社も、事務職を希望したんですが、今のところ、欠員採用をしてないということなので、欠員が出るまでと思って、それで、やむなく、生保レディに。でも、この経験は、役に立つと思っています。セールスは大変な仕事ですが、しばらく頑張るつもりです。そう、12 月から、福岡支社に転勤します。せっかく、知り合いになれたのに残念です」

目を丸くした真樹は、尋ねた。「え、セールスにも転勤があるんですか。大変ですね」羽多は、クスクスと笑い声をあげた。「転勤といっても、地元の福岡支社に、無理を言って転属させてもらったんです。なんだか、都会でやっていく自信がうせてしまって・・」真樹は、眉を八の字にして返事した。「そうでしたか。でも、福岡もいいところだと聞いています。ホークスの本拠地ですよね。ペイペイドームで応援できますね。いつか遊びに行ってみたいな〜〜」羽多は、笑顔で返事した。「遊びに来られた時は、連絡ください。案内しますから。真樹さんは、プロ野球が好きなんですか?」真樹は、恥ずかしそうに返事した。「いえ、野球のルールもよくわからないんです。父が、DeNA ファンなもので、

つい、影響されちゃって」

8

三ツ星運輸の鈴木課長は、DeNA ファン。貴重な情報を得た。樋口先輩は、口うるさく言っていた。まずは、情報収集。それが、武器となる。雑談は情報の宝庫。「真樹さんは、何か、スポーツは?」真樹は、気恥ずかしそうに返事した。「薬学部を目指していたからは、中高の部活は、化学部。スポーツは、からっきしダメ。でも、体を動かさないと病気になるんじゃないかと母が心配するものだから、昨年から、テニス、始めたんです。でも、全く、上達しません。まあ、下手でも、健康を考えれば、続けるつもり。父は、今の肥満体形からは、信じられないんだけど、野球部だったそうなんです」鈴木課長は、学生時代、野球部だった。また一つ情報ゲット。

羽多は、中学、高校、大学通じて、テニス部だった。卒業後は、全く、やっていなかったが、テニスと聞いて名案がひらめいた。「真樹さん、テニスやってるの。私は、学生の時、テニス部よ。どちらかというと、部活をやりたくて K 大に入ったようなものなの。そうだ、テニススクールでお友達になったことにしましょう。真樹さんの紹介ということで鈴木課長と面会できるかも」真樹は、大きくうなずいた。「それって、名案。しかも、父も K 大なんです。先輩後輩の関係でしょ。きっと、うまくいくと思う。ぜひ、アタックして」鈴木課長は、K 大野球部。同じ K 大の先輩後輩の関係。三ツ星運輸の開拓がうまくいけば、御世話になった樋口先輩への置き土産ができる。胸が高鳴ってきた。

どこのテニススクールに通っているか確認することにした。「真樹さん、どこのテニススクールに通っているの?」真樹は、即座に返事した。「東戸塚駅近くの M テニススクール」M テニススクールと頭にメモった。企業訪問のやり方は、習っていない。まずは、樋口先輩に相談しよう。企業開拓は、事前の準備が大切なはず。しっかりとした情報を準備しなくては。早速、会社四季報を購入し、ネットでも調べてみることにした。「今日

は、真樹さんとお友達になれて、すっごく、ラッキー。鈴木課長に面談できたら、報告するわね」真樹の表情に明るさが戻っていた。「羽多さんと気が合いますね。羽多さんとお話しできて、少し気が晴れました。おやじの心配もほどほどにします。そうだ、ライン仲間になってください。いいでしょ」羽多は笑顔でうなずいた。

9

潜入捜査

菅原洋次捜索の手掛かりは、今のところ、彼の写真しかなかった。失踪後、妻、美津子への連絡もなかった。対馬に戻るまでの間、捜索の担当となった伊達と沢富は、雲をつかむような捜索に手を焼いていた。困り果てた伊達は、乗り気ではなかったが、ひろ子に協力を要請することにした。11 月 7 日（土）沢富とひろ子は、伊達のマンションに呼ばれた。そして、4 人による密談が始まった。テーブルを囲んだ四人は、その中央に置かれた菅原洋次の 3 枚の写真に見入っていた。伊達が、愚痴をこぼした。「こいつ、いったい、どこに雲隠れしたんだ。どうやって、探せっていうんだ。まったく、嫌になる。ひろ子さん、この男を見かけたら、教えてくれないか。福岡にいるかどうかもわからないんだが」

ひろ子は、写真に顔を近づけた。「イケメンじゃない。気にかけておくわね。この人、別に、悪いことしたわけじゃ、ないんでしょ。だったら、しばらく待ってれば、いいんじゃない。意外と、ひょっこり、戻ってくるかも」伊達は、元気のない声で返事した。「そうだといいんだが。ヤツ、若いころ、ヤクザだったらしい。本部長は、麻薬の運び屋だったんじゃないか、というんだ。俺も、どうも、麻薬取引にかかわってているような気がしてならん。ヤツ、ヤクザの金を持ち逃げしたんじゃないかと思うんだな」ナオ子が口をはさんだ。「この人、トラックの運ちゃんだったんでしょ。だったら、運ちゃん仲間を当たってみたら、いいんじゃない。誰か、知ってる人がいるかもよ」

沢富が、話しに割り込んだ。「福岡支店の運ちゃんには、当たってみました。でも、誰一人、退職後のことは、知りませんでした。殺されていないとするならば、どこかに潜んでいるわけです。いったい、どこいるんでしょう。皆目、見当がつきません」ナオ子が、予想を述べた。「ヤクザに追われているとして、隠れるのに適した場所と言えば。ドヤ街とか?」伊達が、目を輝かせた。「なるほど、ドヤ街か。三大ドヤ街といえば、大坂の西成あいりん地区。横浜の寿町。東京の山谷。可能性はある。でも、どうやって、探し出すんだ。聞き込みができるような場所じゃない」ちょっと首をかしげて、ひろ子も考えを述べた。「私は、真逆じゃないかと思う。彼は、イケメンで、理知的な顔立ちじゃない。きっと、都会のオフィスを借りて、社長になってるんじゃない。変装してれば、ヤクザも気付かないんじゃないかしら」

10

沢富の心が、ひろ子の意見に傾いた。「なるほど。社長か。ありうるな～。菅原洋次は、旅行と写真が趣味で、おしゃれ好きだったらいい。その点から考えれば、ドヤ街に潜伏するタイプじゃない。高級車を乗り回して、社長の極楽とんぼの旅かもな～」伊達はうなずいた。「本当に、大金をつかんだのならば、ヤツのことだ、派手な暮らしをしてるに違いない。高級車で、気ままな豪遊ってところだろう。でもな～、都会にいるのか?田舎にいるのか?まったく、手掛かりがない」ナオ子もひろ子の意見に傾いていた。「そうよ、大金をつかんだのならば、社長か、成金の若旦那ってとこね。身を隠すために、海外旅行、ってことは考えられない?」伊達は、首をかしげた。「俺も海外旅行を考えてみたが、今、コロナで、海外旅行をするとなれば、厳しいチェックを受ける。ましてや、大金をもって、出国はできない。この線は、ないだろうな」

沢富も同意見だった。「僕も、菅原洋次は、国内に潜んでいると思います。変装すれば、簡単には、見つけられないと思います。旅を続けていると仮定して、今頃どこにいるのでしょう。まったく、見当がつきませんね。手掛かり、一つない」ひろ子が、提案した。「知り合いの運転手たちに、この写真の男を見たら、知らせてもらうようにお願いしてみます。この写真をお借りしてもいいですか?」3 枚の中の顔が大きく写された写真を手に取った。伊達は、即座に返事した。「いいとも、でもな～、変装してたら、わからんだろうな～。愛人と夫婦を装って、旅をしてる可能性もある。ますます、厄介だ。いったい、どうすりゃいいんだ」沢富が、身を乗り出して発言した。「菅原は、お城の写真を何枚も撮っていたじゃないですか。ということは、お城巡りの旅をやってるんじゃない

ですか？」

　伊達は、大きくうなずいた。「お城巡りか。これは、大きな手掛かりになる。でも、俺たちも、お城巡りをやるのか。そりゃ〜、ムリだ」ひろ子が、目を輝かせて応答した。「お城巡りなら、私たちに任せて。ナオ子さんと二人で、お城巡りの旅に出ます。この写真があれば、見つけられるような気がします」伊達が、目をむき出して返事した。「え、二人で、お城巡り。お城って、全国にいくつあると思ってんだ。名城だけでも、100 はあるんだぞ。宝くじみたいな人探しじゃないか。そりゃ〜〜、ムリだ」ナオ子が反論した。「何言ってんの。刑事は、足でしょ。とにかく、写真に撮ってみたいようなお城を片っ端からあたるのよ」ポカ〜〜ンと口を開けて、あきれ返った顔の沢富が応答した。「気持ちは、わかりますが、お二人は、刑事じゃないんです。おとなしくしていてください」

11

　ひろ子が、即座に応答した。「乗りかかった舟じゃない。私たちに任せてよ。必ず、土産、持って帰るから」伊達が、顔をしかめて返事した。「困ったもんだ。捜索は、遊びじゃないんだ。時間も金もかかる。ひろ子さんは、結婚を控えてるというのに。余計な出費は、禁物じゃないのか。捜索は、俺たちに任せてくれ。いいな」ナオ子が、口をとがらせて応答した。「捜索は、遊びじゃないぐらいわかってるわよ。二人に協力しようと思って、お城を巡るんじゃない。そんなこと言うんだったら、どうやって捜索つもりなの。聞かせてよ、さあ」伊達は、返事に困った。今のところ、これといった手段が見つからなかった。自分たちに、お城巡りができないことは、はっきりしていた。沢富も返事ができず、うつむいてしまった。

　伊達が、顔を赤くして返事した。「だからだな〜〜、とにかく、捜索は、刑事の仕事だ。二人は、結婚準備に専念してくれ」ひろ子も結婚準備のことが気にかかったが、お城巡りをやったからといって、結婚準備に差し支えるわけではない。ただ、旅費のことが気にかかった。要は、伊達は、費用のことを言っているに違いない。ひろ子は、しばらく考え込んだ。名案が浮かんだひろ子は、笑顔で返事した。「旅費のことは、心配ご無用。お城巡りをユーチューブにアップする。人気が出れば、経費の足しになる。名案でしょ」ナオ子が、即座に応答した。「名案じゃない。美女二人、隠れた名城の旅！ なんてのはどう？ これって、いけるかも。やりましょう」

伊達は、有頂天になった 2 人に、つい、嫌味を言ってしまった。「おい、おい、何が、美女二人だ、おばちゃん、二人旅じゃないか。そんなのは、だれも見やしない。やめとけ、二人がかかわったら、ろくなことはない。とにかく、俺たちに任せろ」伊達はまずいことを言ってしまったと沢富は思った。その瞬間、予感は的中した。ナオ子が目を吊り上げて反論した。「おばちゃん、二人旅、それって、私がブスってこと。こうなったら、絶対、人気を取ってやる。ひろ子さん、やってやろうじゃないの。こうなったら、だれが何と言おうと、やるから。登録者数、100 万人目指しましょう。今に、見てらっしゃい」ひろ子もやる気満々だったが、そこまで言わなくてもと顔をしかめた。

12

ひろ子は、二人をなだめるように応答した。「お二人には、迷惑をかけません。無理をしない程度にやります。いいでしょ」顔を見合わせた伊達と沢富は、うなずいた。伊達が、諦めた表情で返事した。「しょうがないな〜〜。無理はしないでくれよ。お城巡りを楽しんでもらえればいい。運が良ければ、ヤツと巡り合うかもしれん。神に祈ろう」ガッツポーズのナオ子は、さっと立ち上がり、祝杯の準備に取り掛かった。グラスにビールを注いだナオ子は、乾杯の音頭を取った。「お二人の結婚と美女の旅を祝して、カンパ〜〜〜イ」伊達と沢富は、適当な笑顔で、イエ〜と歓声を上げた。ナオ子が、二人の顔を見つめ小言を言った。「なによ、付け足したような笑顔。もっと、心から、喜べないの。美女に恵まれたことに感謝しなさい」ナオ子は、いったん根に持つとねちねちと責めるタイプだった。

菅原洋次が旅に出て、3 か月後に、妻美津子は捜索願届を出した。伊達には、このことが気にかかった。確かに、旅に出て、3 ヶ月もの間、何の便りもなければ、不安になる。いや、1 ヶ月でも不安になるはず。なぜ、もっと早くに、捜索願届を出さなかったのか? 三ツ星運輸の鈴木課長は、何度か、菅原洋次の行方を尋ねに福岡まで来たという。そうであれば、不安は募ったはず。なのに、3 ヶ月たって、やっと、捜索願届を出している。

もしかすると、本当は失踪していないのではないか?美津子は、居場所を知っているのではないか?密かに、夫をかくまっているのではないか?この失踪は、夫婦で打ち合わせた共謀ではないのか?であれば、警察は、いいように利用されていることになる。理知的な菅原洋次であれば、やりかねない。

鍋を前にした沢富は、ビールで喉を鳴らしていた。「このエビ、甘くておいしいですね」ナオ子が返事した。「ホタテもおいしいわよ。クエも、もちもちして、歯ごたえあるでしょ」伊達が、ナオ子にイモのお湯割りを催促すると心に秘めていたことを話し始めた。「二人の捜索協力を得て、心強いんだが、ちょっと気になることを話しておきたい。菅原洋次の妻、美津子のことだ。美津子は、中洲のクラブシャネルでホステスをやっている。だから、夫が失踪したからといって、生活には困らなかったはずだ。でも、腑に落ちないんだ。夫が失踪して 3 ヶ月後に捜索願届を出している。これって、ちょっと遅すぎないか?退職後、何度か、鈴木課長は、洋次の行方を尋ねに福岡まで来ている。普通だったら、不安に思って、もっと早くに、捜索願届を出しても、よさそうじゃないか」

13

三人は、打ち合わせたようにうなずいた。ひろ子が同意を示した。「そういわれれば、ちょっと変。サワちゃんが、2 週間、音信不通だったら、捜索願届、出すわよ」ナオ子が意見を述べた。「3 ヶ月も、平気だったってことなの?それとも、別れ話が、持ち上がっていたの?とにかく、変ね。何か裏があるような」沢富が、意見を述べた。「確かに、変です。遅すぎますよ。もしかしたら、本当は、菅原洋次の居場所を知っているのでは？ 菅原洋次に頼まれて、失踪したことにしているのかも。そうだとすれば、美津子は、菅原洋次とどこかで会っているとも考えられます。美津子を張り込みますか」伊達も沢富と同感だった。「サワもそう思うか。俺もだ。美津子は、におう。美津子を張り込んでみるか」

ひろ子が沢富に尋ねた。「それじゃ、お城巡りは、無駄ってこと」沢富が返事した。「いいえ、居場所を知っているといっても、一定の場所に潜んでいるとは限らない。やはり、お城巡りの旅をしていると思います。おそらく、連絡を取り合って、どこかのお城で会うつもりなのでしょう。きっと、落ち合う場所は、お城でしょう」ナオ子が、応答した。「お城巡りは、無駄じゃないのね」伊達が、返事した。「あくまでも、刑事の直感だが、洋

次と美津子は、連絡を取り合っているような気がしてならない。1か月に1度か、半年に1度か、それはわからんが、きっとお城で落ち合うような気がする。一度、美津子のクラブに潜入してみるか」沢富が、しかめっ面で返事した。「それはちょっと、美津子が務めているシャネルと言えば、超高級クラブで有名じゃないですか。安月給の僕らの給料で通えるクラブじゃありません。しかも、完全会員制です」

伊達もうなずきながら、頭をかいた。「そうだよな。社長、代議士が会員のクラブだもんな。入会金も高いんだろうな。それじゃ、根気よく張り込む以外ないな」沢富は、ちょっと首をかしげて、考えていた。ポンと手を打つと笑顔で返事した。「クラブに潜入する方法があります。ほら、瑞恵さんです。彼女は、中洲のホステスだったんでしょ。美人の彼女だったら、超高級クラブでも、採用されますよ」眉間にしわを寄せた伊達は、同意の表情を見せなかった。出口巡査長にかかわる潜入捜査であれば、依頼もできるが、今回は、単なる失踪事件でしかない。しかも、瑞恵は、大野巡査との結婚を控えている。「瑞恵か。確かに、瑞恵だったら、美人だし、採用されるだろう。でもな～、出口巡査長の捜査じゃない。しかも、瑞恵は、結婚を控えている。気が進まない」

14

ひろ子も伊達の意見に賛成だったが、本人の気持ちを確認してもいいのではないかと思った。というのは、結婚式の費用とその後の生活費を稼ぐいいチャンスだと思ったからだ。結婚してしまえば、警察官の妻となり、水商売はできなくなる。対馬での生活費は、都会ほど負担にならないが、対馬では、主婦のバイトを探すのは難しい。結婚前に、ある程度の貯金をしておくことは賢明。「確かに、瑞恵さんが、シャネルに潜入できれば、美津子さんに接近できる。もしかしたら、ちょっとした雑談で、夫に関することを漏らすかもしれない。そう考えると、捜索の手掛かりを得るには、瑞恵さんしかいないような。どうかしら、一度、事情を話して、瑞恵さんの気持ちを聞いてみては?」

腕組みをしてしかめっ面の伊達は、う～～とうなった。「協力してもら得れば、捜索にも進展がみられるかもしれんが、でもな～、瑞恵さんの身に何かあったら、取り返しのつかないことになる。出口巡査長にかかわる潜入であれば、お願いできなくもないが、今

回は、全く関係ない。ヤッパ、気が進まない」ひろ子には、菅原洋次の失踪に麻薬取引が絡んでいたのなら、対馬の麻薬密輸ともかかわりがあるように思えた。密輸された麻薬は、対馬から博多に運ばれ、博多から三ツ星運輸のトラックで、関西、関東に運ばれていたのではないか?そう考えれば、菅原洋次の身柄確保は、麻薬密輸の解明の手掛かりになる。ひろ子は、思いを述べた。「菅原洋次の失踪が、麻薬取引とかかわっていたとするならば、対馬の麻薬密輸ともかかわりがあるかもしれません。であれば、出口巡査長の死と無関係とはいえないのでは?」

沢富が、目を丸くして身を乗り出した。「確かに。その線はあります。菅原洋次が麻薬の運び屋だったとしたら、一刻も早く、身柄を確保しなければ、消されるかもしれません。おそらく、消されることがわかっていたから、取引のお金を持ち逃げしたんじゃないでしょうか?」目を吊り上げた伊達は、大きくうなずいた。「なるほど。本当に、菅原洋次が、麻薬の運び屋だとしたら、一刻も早く、身柄を確保しなくてはならん。気が進まないが、瑞恵に、お願いするか。美津子に接近できるのは、瑞恵しかいない。でもな～、瑞恵は大野巡査の婚約者だ。大野巡査が反対するかもしれん。それに、瑞恵は、対馬だしな～～」ひろ子が、提案した。「わかりました。私が、瑞恵さんと大野巡査に会って、事情を説明します。早速、明日、電話して、いつ会えるか、確認してみます」

15

ひろ子は、電話で瑞恵と打ち合わせを行った。瑞恵と大野巡査は、クライマックスシリーズ第一戦の観戦チケットを取っていた。11 月 14 日（土）ロッテ戦を観戦し、その夜は、ヒルトンホテルで一泊し。翌日、市内を観光し、対馬に帰る日程を立てていた。ひろ子は、手短に、麻薬の運び屋と思われる菅原洋次失踪の概略を話し、夫をかくまっていると思われるホステスの妻美津子への接触の依頼を瑞恵に伝えた。すると、瑞恵は、大野巡査と同席で詳しい話を聞きたいということだった。そのことを伊達夫妻に伝えたところ、15 日、日曜日の午前 11 時 30 分にマンションで会食することになった。

11 月 15 日（日）ひろ子と沢富は、11 時にはマンションに到着した。そして、ひろ子は、昼食の準備を手伝っていた。瑞恵と大野巡査は、ちょうど 11 時 30 分にマンション

にやってきた。出迎えたひろ子は、二人をテーブルに案内した。ナオ子が歓迎の挨拶をした。「いらっしゃい。お二人とも、元気そうで、よかった。今日は、婚約の祝杯を挙げましょう」ひろ子も祝福の挨拶をした。「ご婚約おめでとう。二人は、とってもお似合い。ホークス、クライマックス第一戦、勝利。縁起がいいじゃない。来春が楽しみね」沢富も祝福した。「ご婚約、おめでとう」

伊達は、食事の前に潜入捜査の件を話すことにした。「瑞恵さん、大野巡査、ご婚約、おめでとう。誠に恐縮なんだが、食事の前に、話を聞いていただきたい。早速だが、先月、福岡市在住の菅原洋次の捜索願届だ出された。彼は、三ツ星運輸のトラックの運転手をやっていたが、6 月末に退職し、7 月から、旅に出た。妻、美津子の話では、旅に出てから、全く音信不通ということだ。夫が、何かの事件に巻き込まれたのではないかと不安になり、捜索願届を出したというわけだ。今のところ、菅原洋次に関する事件の情報はない。ということは、今も、旅を続けていると思われる。でも、いくつか、気になる点がある。一つは、三ツ星運輸の総務課長が、たびたび、彼の行方を尋ねに、福岡まで来ているということだ。なぜ、しつこく、退職社員の行方を尋ねるのか?」

16

伊達は、お茶をすり、一呼吸おいて、話を続けた。「二つ目は、菅原洋次は、若いころヤクザだったということだ。もし、現在も、ヤクザとのつながりがあったのなら、事件に巻き込まれている可能性もある。三つ目は、旅に出て、音信不通だったにもかかわらず、3 ヶ月後に、妻美津子は、捜索願届を出している。これは、遅すぎるのではないか。これからは、サワと俺の憶測なんだが、菅原洋次は、麻薬の運び屋だったのではないか。また、今回、旅に出たというのは、麻薬取引の金を持ち逃げした、ということではないか。何の根拠もないんだが、そう思えてならない。もし、菅原洋次が、ヤクザの金を持ち逃げしたのなら、奴らは、必死になって探しているに違いない。もし、見つけ出されたら、金は奪われ、消されるに違いない」

瑞恵と大野巡査は、真剣に耳を傾けていた。沢富が、一呼吸置いた伊達を横目に見て、話しに割り込んだ。「私たちの考えは、だいたい、わかっていただけましたか。万が一、旅に出た菅原洋次が、本当に、麻薬取引にかかわる金を持ち逃げしていたとするならば、奴らに、見つけられ次第、消されるでしょう。我々としては、そうなる前に、一刻も早く、菅原洋次の身柄を確保したいのです」伊達が、ゴホンと一度咳払いをして話し始めた。「菅原洋次を、一刻も早く、見つけ出し、身柄を確保したいのだが、今のところ、探し出そうにも、全く手掛かりがない。手掛かりと言えるほどではないが、菅原洋次は、写真とお城巡りが、趣味らしい。そこで、ひろ子さんとナオ子は、お城を当たってくれることになったが、菅原洋次と出くわすのは、宝くじ当たるのと同じようなものだ」

疲れた表情の伊達に代わって、沢富が話を続けた。「今のところ、菅原洋次が、どこに潜伏し、どのあたりで旅を続けているのか、全く、わかりません。あくまでも、我々の憶測なんですが、妻の美津子は、菅原洋次と打ち合わせて、失踪 3 か月後に、捜索願届を出すことにしていたのではないか。また、失踪後も、菅原洋次と連絡を取っているのではないか。これも、根拠はないのですが、そう思えるのです。そこで、美津子を張り込むことにしたのですが、これだけでは、情報が取れない。いっそのこと、情報収集のために、美津子が務めているクラブシャネルに飲みに行こうかと考えたのですが、なんせ、超高級クラブで、安月給の刑事が通えるクラブではない。そこで、瑞恵さんのお力をお借りできないか、と思いまして。当然、大野巡査のご承諾を得てのことです」

17

瑞恵は、伊達と沢富の言いたいことはわかっていたが、大野巡査の目の前で、はっきりと言葉に出してほしかった。「協力するということは、どうゆうことですか?はっきり言ってください」伊達が、身をただし、返事した。「これは、お願いです。いやなら、きっぱり、お断りください。お願いとは、美津子が務めているシャネルに潜入していただけないかと。つまり、シャネルのホステスになって、美津子に接近してもらえないかと。いや、あくまでも、お願いです。婚約なされたばかりだし、こんなことをお願いするのは、失礼とは、存じています」即座に、大野巡査が、顔を真っ赤にして、反対した。「先輩、

それはないでしょ。来春、結婚するんです。ホステスになれと言うのは、あんまりです。出口巡査長とかかわりがあるわけでもないのに、ひどいですよ。あんまりです。そこまで、警察に協力する義務は、ないはずです。僕は、反対です」

伊達は、即座に謝罪した。「大野巡査、誠に失礼した。まったくもって、お恥ずかしい。こんなお願いをするとは、俺も馬鹿だった。許してくれ」伊達は、沢富に怒鳴った。「お前も、謝らんか！」沢富は、顔を真っ赤にして、頭を下げた。「申し訳ありませんでした。お許しください。大野巡査、誠に、申し訳ない」うつむいていた瑞恵が、つぶやいた。「菅原洋次が、麻薬取引に、かかわっている可能性があるんですね。麻薬の運び屋だとすれば、対馬の麻薬密輸ともかかわっているかもしれませんね。もしかしたら、手掛かりがつかめるかも・・シャネルのホステスですか」大野巡査が、口をはさんだ。「瑞恵さん、何もそこまでして、警察に協力しなくていいのです。僕が、警察官だからですか? 僕のことなんか、気にしないでください」

瑞恵は、マジな顔つきで返事した。「もし、菅原洋次が麻薬の運び屋だったとして、身柄を確保できたら、密輸に関する何らかの情報が得られるかも。やってみても・・」大野巡査が、血相を変えて、応答した。「何、言ってるんです。ヤクザだって、美津子を疑っているに違いない。奴らも、きっと、会員になって、美津子を見張ってる。危険です。僕は、絶対、反対です」俯いていた瑞恵が、覚悟を決めたかのように話した。「シャネルのホステスは、誰でもなれるってわけじゃない。面接を受けたからといって、採用されるとは限りません」面接を受けるつもりと思った大野巡査は、念を押した。「きっぱりと、断ってください。出口巡査長のことがあったにせよ、警察に恩を感じる必要はないんです。瑞恵さん」

18

瑞恵は、兄の死のことが、心から離れなかった。警察に協力するというより、何らかのかたちで、仇を取りたかった。「何といえばいいか、自分にもよくわからないんです。やらねばと心がささやくの。英雄さん、3 か月、やらせて。それで、ダメなら、引き上げるから」大野巡査は、意外な決意に何も言えなかった。まだ、出口巡査長の死を引きずっ

ていると直感した。「先輩、本当に、大丈夫なんですか。瑞恵さんに、何かあったら、どうしてくれるんです。僕たち、結婚するんです。こんな話、するから・・」伊達が、即座に返事した。「すまん。もし、やってもらえるなら、瑞恵さんの身辺警護は、任せてくれ。俺たち二人が、責任もって守る。本当に、やってくれますか、瑞恵さん」

瑞恵は、うなずいた。「採用されるかどうか、わかりませんが、面接に行ってみます。面接でダメだったら、諦めてください」無理難題を押し付けてしまって、気まずかったが、沢富は、改めてお願いすることにした。「ありがとうございます。瑞恵さんの身は、僕らが、命を懸けて守ります。よろしくお願いします」沢富は、深々と頭を下げた。伊達も、身をただし、頭を下げた。ナオ子も恐縮して、お礼を言った。「瑞恵さん、大野さん、本当にありがとう。本部長、直々の指令なもので、こんな無理を言って、一生、恩に着るわ。あなた、大野巡査のこと、よろしく頼むわよ。サワちゃん、わかってるでしょ」沢富は、大野巡査を見つめると返事した。「今回の仕事は、大野巡査の協力なくして、なしえない。心に、しっかりと刻みます。大野巡査、ありがとう」

19

正義への復讐

ヤクザの金を持ち逃げした限り、捕まれば、消される。菅原洋次は、そのことを覚悟し

ていた。また、失踪後、美津子は奴らに張り込まれる。いずれ、夫の居場所をゲロさせるために、美津子は、拉致され、拷問にかけられる。そのことを察知していた菅原洋次は、警察に自分の捜索願届を出すようにと置手紙を残していた。というのは、警察は、捜索の手掛かりを得るために身元調べを行う。そして、菅原洋次が元ヤクザであったということを知れば、彼の失踪にヤクザが絡んでいると警察は考えると推測したからだ。そうなれば、警察は、美津子の身辺警護を兼ねて、彼女を張り込むことになる。菅原洋次は、美津子の身を守るには、この方法しかないと考えた。また、逃走後の情報を美津子に一切知らせなかった。知ってしまえば、隠そうとする気持ちが彼女の顔に現れるからだ。

美津子は、じっと、菅原洋次からの連絡を待っていた。美津子は、菅原洋次を信じていた。必ず、連絡がある。自分を捨てるはずがない。美津子は、何度も、自分に言い聞かせた。店では、明らかに美津子を張り込んでいるヤクザと思われるお客が、度々、彼女を指名し、動向を探っていた。身の危険を感じた美津子は、度々、捜索状況を確認にするために、警察に出向いていた。これは、予想以上に、奴らの強行策の抑制になっていた。また、奴らは、拉致した挙句、殺すことはないと美津子は密かに考えていた。今、美津子を殺してしまえば、永遠に、菅原洋次は、姿を現さないことになる。これでは、奴らも金を回収できなくなってしまう。美津子は、菅原洋次を釣るための大切なエサなのだ。

11 月 21 日（土）午前 11 時に新人の瑞恵が、挨拶がてら、薬院駅近くにある美津子のマンションにやってくる。瑞恵はシャネルに勤務して 3 日の新人だったが、出身が対馬と知って、美津子は親近感を抱いた。美津子は、対馬の南東に位置する壱岐島出身だった。瑞恵が、11 時少し過ぎにやってきた。ダイニングに案内された瑞恵は、手土産のメロンを差し出した。「美容に、いいかと思って、どうぞ」美津子は、静岡クラウンメロンの表示に目を丸くして、笑顔で返事した。「まあ～、ありがとう。メロン、大好物なの。GABA が豊富なのよね。早速、いただきましょう。こちらにかけて。紅茶入れるわね」美津子は、沸騰させたお湯をティーポットに注ぎ、茶こしでカップに注いだ。そして、ティーカップを瑞恵の前に静かに差し出した。「どうぞ」美津子も腰掛け笑顔を作った。「部屋には、だれも呼んだことがないの。瑞恵さんが、初めて。なんだか、お友達になれそう」

20

美津子は、洋次がいなくなり、心細くなっていた。しかも、紳士ぶったヤクザらしき輩に付きまとわられる毎日に気持ちが疲弊していた。そんなとき、離島の仲間ができた

ことで心が安らいだ。「瑞恵さんは、対馬を出てから、こちらでずっと働かれていたの?」瑞恵は、一昨年、兄の死をきっかけに対馬に戻らざるを得なかったことを話すことにした。「高校を卒業して、福岡で働いていたんですが、一昨年、兄が、事故死したもので、母の面倒を見るために、対馬に戻りました。今は、母も元気なので、少し、貯金をしたいと思って、また、中洲で、3ヶ月ほど、ホステスで稼ぐことにしました。よろしくお願いします」美津子は、小さくうなずいた。「そうだったの。お兄様がなくなられたの。交通事故か何かで?」

瑞恵は、返事に困ったが、話を合わせることにした。「はい、兄の不注意だったんです」美津子は、悲しげな表情で返事した。「それは、お気の毒に。ところで、3ヶ月って言ってたけど、何か理由でも?できれば、シャネルの戦力になっていただけたら、助かるんだけど。ママが、すごく気に入ってるのよ。きっと、シャネルのスターになれるって」瑞恵は、苦笑いして返事した。「実は、来春、結婚するんです。それまで、ガッツリ稼ごうと思って。申し訳ありません」美津子は、返事した。「謝ることは、ないわよ。めでたいことじゃない。結婚資金の準備ね。ちょっと、残念だけど、結婚は、新たなスタートだもの。お幸せに」瑞恵は、快く理解してくれたことに感謝した。「ありがとうございます。短い間でも、一生懸命やらせていただきます。頑張ります」

瑞恵は、菅原洋次について聞き出したかったが、下手にプライベートを詮索すると怪しまれると思い美津子に関する情報を取ることにした。「美津子さんは、シャネル、長いんですか?」美津子は、10年のホステス歴があり、シャネルは5年目に入っていた。「シャネルは、5年目になるかしら。でも、もう、年だから、お払い箱になるんじゃないかしら。そうなったら、小さなお店でも開こうかしら。いやね、年取るって」30代半ばだと見受けられたが、肌に艶があり、まだ、20代後半に見えた。「何おっしゃるんですか、まだ、お若いじゃないですか。まだまだ、シャネルの女王ですよ。私何って、足元にも及びません。先輩を見習って、頑張ります」

21

女王と言われ機嫌をよくした美津子は、菅原洋次のことを話し始めた。「ここだけの話よ。お店のだれにも話しちゃだめよ。お店では、独身で通してるの。でも、実は、結婚してるのよ。子供はいないけどね。それが、ちょっと、困ったことになったのよ。主人が、ポイッと、7月に旅に出て、いまだ、帰ってこないのよ。いったい、どこを旅してるのやら、いやになっちゃう」チャンス到来と瑞恵は、話に食いついた。「ご結婚なされていたんですか。全く、見えませんね。独身だと思っていました。7月からだと、3ヶ月経ちますね。旅先から、絵葉書の便りがあるとか?」美津子は、顔を振った。「まったく。電話も、メールも、手紙も、全くなし。突然、この世から消えたみたい。私が、嫌いになったのかしら」

瑞恵は、悲観的な気持ちを打ち消すように励ました。「そんなに、自分を責めては、いけません。必ず、戻ってこられますよ。美津子さん以上の美人は、いませんから。自信を持ってください」またまた、お世辞を言われ、饒舌になった。「そお〜、言ってくれると、安心するわ。今、思い返すと、去年の春ごろから、なんだか様子が変だったのよ。時々、意味の分からないことをつぶやいていたの。必ず、正義に復讐してやる、とか。国家は信じられない、とか。警察は腐っている、とか。何かあったのかしら。私には、全く、心当たりがないのよね」正義と警察と言う言葉に、瑞恵の心が引かれた。「正義に復讐、ですか。ちょっと、意味わかりませんね。ところで、ご主人、何をなされていたんですか?」

美津子は、胸に押し込めていたもやもやしたものを吐き出したくなった。「主人、トラックの運転手。それが、突然、6月末に、会社辞めて、旅に出たってわけ。全く、意味わかんない。男って、身勝手なんだから。これから、どうすりゃいいのよ。あ〜〜、いやになっちゃう」瑞恵も、頭がこんがらがってきた。ご主人は、何か心を大きく動かされる事件に遭遇したのではないか？ 正義、国家、警察、いったい何を意味しているのか?ご主人について、もう少し聞いてみることにした。「ご主人は、どちらの出身ですか?」美津子は、首をかしげて返事した。「対馬といってたような。イケメンでやさしくて、好きになったんだけど。それがね。主人のこと、あまり知らないのよ。趣味は、写真でしょ、旅でしょ、野球でしょ、将棋でしょ、おしゃれでしょ、そう、人付き合いは、好きじゃなかったみたい」

瑞恵は、対馬出身と聞いて、ますます興味がわいてきた。「え、私と同じじゃないですか。もしかして、カトリックですか?」美津子は、大きくうなずいた。「そう、私も、主人も、カトリック。主人と知り合ったのは、大名町教会、クリスマスミサの時だった。運命の出会いだったはずなのに。どうして・・」瑞恵は、美津子との出会いに運命を感じた。「私も、カトリックです。これって、運命の出会いですよ。きっと、神のご加護があると信じます。ご主人が、カトリックだったならば、社会の不正を憎むのはわかりますが、正義に復讐ってのは、意味わかりませんね。何か、人には言えない深刻な事件にかかわられたんではないしょうか?よくわかりませんが。あ、そう、野球が趣味って言われてましたね。野球をなされていたんですか?」

美津子は、曖昧な返事をした。「野球ね〜。詳しいみたいだったけど、やっていたかどうかは、わかんない。ホークスファンだったから、何度か、二人でドームに応援に行ったわね。そう、千賀は、球史に残るピッチャーになる。俺も、プロになりたかったな〜、なんて言ってた。やっていたのかもね」もし、やっていたのならば、高校で野球部だったかもしれない。上対馬高校野球部ってことはないだろうか。もしそうだったら、兄の先輩ということになる。調べてみる価値はある。英雄に確認してもらおう。お城巡りに関して聞くことにした。「写真とお城巡りが趣味って、ロマンチックな方だったんですね。どんなお城を撮って、いらしたんですか?」

美津子は、リビングの書棚から、アルバムを取り出してきた。「いろんな写真を撮っていたけど、特に、お城の写真が多かったわね。有名なお城から、あまり、知られていないようなお城まで、撮っていたみたい。ほら、このお城、どこのお城かわかる?」瑞恵は、お城のことは、全く知らなかった。知っているお城と言えば、対馬市厳原町（つしましいづはらまち）にある金石城（かねいしじょう）ぐらいだった。「このお城ですか？ 歴史、苦手だったんです。お城のことは、全く分かりません」美津子は、思い出しながら説明した。「受け売りなんだけどね。このお城は、会津若松城。白虎隊（びゃっこたい）の話を悲しげに話していたのよ。ほら、飯森山（いいもりやま）で、若い兵士が自刃（じじん）した話、知ってるでしょ。かわいそうな話じゃない」瑞恵は、詳しい内容は知らなかったが、白虎隊のドラマの主題歌”愛しき日々”を聞いたことがあった。

23

美津子は、急に思い出したかのように、話を続けた。「そう、一度、誰かを恨んでるかのような目つきで、涙をこらえながらつぶやいていた。” 何が、正義だ。純粋な若者を、騙しやがって。畜生。きっと、仇は取ってやる。” そんなことを言ってたのよ。白虎隊のドラマにのめり込んだのかも。情が厚かったのね」仇と聞いて、ハッとした表情で美津子を見つめた。自分と同じ思いをしていたことに驚きを隠せなかった。「仇、ですか。もしかしたら、旅に出られたのは、仇を討つためかもしれません。それしか、考えられません」美津子は、あきれた顔で返事した。「白虎隊の話は、明治維新の話でしょ。まさか、そこまで、アホじゃないと思うけど」瑞恵は、激しく顔を振った。「そうじゃないんです。白虎隊の仇じゃないんです。きっと、誰かの仇です。だから、突然、愛する美津子さんをおいてまで、旅に出たんです」

瑞恵の話を聞いていると、なぜか、本当のように思えてきた。美津子は、呆然とした表情でうなずいた。「仇討ち。いったい誰の?まさか、仇討ちして、自殺する気じゃないでしょうね。そんなのいやよ。江戸時代じゃあるまいし。バカなの」瑞恵は、そっと話しかけた。「あくまでも、憶測です。そうでないことを願っています。とにかく、一緒に、ご主人を探しましょう。そして、仇討ち、何って、バカなことをやめさせましょう。美津子さん、元気を出してください」美津子は、魂を抜かれたような青白い顔で静かに返事した。「いったい、どこに行ったのよ。バカ、バカ、絶対、私をおいて、自殺しないでよ」瑞恵は、そっと、美津子の手を握りしめた。瑞恵の脳裏には” 愛しき日々 ” を歌う堀内孝雄の切ない声が静かに流れていた。

・・風の流れの　激しさに　告げる想いも　揺れ惑う　かたくなまでの　ひとすじの道　愚かものだと　笑いますか　もう少し時が　ゆるやかであったなら・・　雲の切れ間に　輝いて　空しい願い　また浮かぶ　ひたすら夜を　飛ぶ流れ星　急ぐ命を　笑いますか　もう少し時が　優しさを投げたなら　愛しき日々の　はかなさは　消え残る夢　青春の影・・

死神サークルⅡ

著　　春日信彦

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社